

洋13-25

「王になった男」★★★★★

2013（平成25）年2月17日鑑賞<梅田ブルク7>

監督：チュ・チャンミン

脚本：ファン・ジョユン

ハソン（王の影武者となった道化師）/イ・ビョンホン

光海君（クアンヘグン）（朝鮮15代目の王）/イ・ビョンホン

ホ・ギユン（都承旨、承政院の長官）/リュ・スンリョン

王妃（光海君の正室）/ハン・ヒョジュ

チョ内官（ハソンの世話係）/チャン・グアン

ト部将（王の護衛官）/キム・イングオン

サウォル（毒味役の女官）/シム・ウンギョン

パク・チュンソ（吏曹大臣）/キム・ミョンゴン

ユ・ジョンホ（王妃の兄）/キム・ハクチュン

2012年・韓国映画・131分

配給/CJ Entertainment Japan

<似たようなタイトルで、燕山君に続き光海君が！>

徳川幕府は徳川家康から第15代将軍・徳川慶喜まで（1603～1868年）265年間続いたが、朝鮮の李王朝は李成桂の太祖から27代目の純宗まで（1392～1910年）518年間続いた。パンフレットにある康熙奉氏のコラム「知られざる光海君の生涯」によると、朝鮮王朝には27人の王がいたが、その名に「君」がついているのは10代王の燕山君と15代王の光海君の2人だけ、だそう。つまり、「実は、王の名は死後に贈られた尊号なのだが、クーデターで王座を追われた王にだけは尊号がつかなかった。よって、王子のときの名がそのまま今も通称名となっている」そう。王座を追われたのだから、よほどの暴君だったのだろう。たしかに、李王朝史上最悪の燕山君の時代に生きた2人の旅芸人を主人公とし、「王を笑わせなければ死刑」をテーマにした『王の男』（05年）（『シネマールーム12』312頁参照）を観れば、燕山君の暴君ぶりがよくわかる。

ところが、光海君は豊臣秀吉が朝鮮出兵した1592年から1598年の文禄・慶長の役（朝鮮では壬辰倭乱）で武勲をあげたことによって15代王に即位し、歴史的にも「大同法制定」などの「善政」を敷いていたはずなのに、なぜ「暴君」に？それは、朝鮮王朝を記録した『朝鮮王朝実録』の中に、「隠すべき事は、残すべからず」と書かれていたことをもとに自由な想像を膨らませたため。実際の光海君は誰よりもドラマチックな人生を送った暴君と評されつつ、最近では悲運の改革君主として再評価されているらしい。しかし、『王の男』と似たようなタイトルの本作『王になった男』において、燕山君に続いて光海君が登場！

<大鐘賞15冠、観客動員数歴代第3位の魅力は？>

本作は「韓国のアカデミー賞」と言われる第49回「大鐘賞」で史上最多15部門を受賞した。また、観客動員数で歴代第1位『グエムル 漢江の怪物』（06年）（『シネマールーム11』220頁参照）の1301万人、第2位『泥棒たち』（12年）の1298万人に次ぐ1231万人で、見事第3位にランクインした。ちなみに、第4位が『王の男』の1230万人で、第5位が『ブラザーフード』（04年）（『シネマールーム4』207頁参照）の1174万人だ。

このように本作が作品として高い評価を受けるとともに興行的にも大成功した理由は、監督自身も分析しているように、本作のシナリオの良さと一人二役を演じたイ・ビョンホンの演技力にある。韓流の時代劇はテレビでもよく放映され、多くの日本人の心をつかんでいるが、やはりとっつきにくい感は否めない。しかし、本作は光海君という韓国の人なら誰でも知っている歴史上の人物に焦点を当てたうえ、『朝鮮王朝実録』の中にある「隠すべき事は、残すべからず」という文章をもとに自由な発想を働かせて、重々しい宮廷と威厳ある王・光海君のストーリーと道化師上がりのハソンのコミカルなストーリーを「映画はエンタメ！」という基本どおりの脚本をつくり上げた。全体のまとめ方とストーリー展開における硬軟の対比が絶妙ということだ。

他方、そのすばらしさをスクリーン上で具現化したのが、1970年生まれの俳優イ・ビョンホン。暴君の光海君と道化師のハソンという両極端な2人の人物を演じ分けるだけでも大変なのに、それぞれの人物の複雑で多様な性格を巧みに表現した演技はまさにお見事。もっとも、私としては前半のコミカルな面のウエイトが少し大きすぎたため、「王の仕事とは何か？」「平民は王に何を望んでいるのか？」という根源的な部分の扱いが若干不十分なのでは？という気がしているが、それでも全体的なバランスとしては十分OK。心に響く度合いとしては、私は本作より『王の男』の方が好きだが、後世に語り継ぐべき映画としては、『王の男』より本作の方が上？

<『影武者』との異同を考える>

本作は王と賤民との「入れ替え」がテーマだが、極端に立場の違う人間の何らかの必要のための「入れ替え」をテーマとした物語は、古今東西を問わずたくさんある。そこで、本作と、本作を観て特に私が思い出した2つの映画の異同を少し考えたい。

その1は、黒澤明監督の『影武者』（80年）。同作は、主役に予定されていた勝新太郎が降板し、仲代達矢が代役になったという「スキャンダル」でも有名だが、映画は堂々のスペクタクル巨編に仕上がっていた。同作は、戦国時代に最も恐れられていた武将・武田信玄の死亡を隠すため、盗人の卑しい男をその「影武者」に仕立てるという設定だった。したがって、反対勢力による暗殺（毒殺）に脅えて「代役」を立てようとする本作の光海君とは「動機において異なる」ものの、その目的、狙いは同じだ。また、ストーリー前半の見どころ（面白さ）が、卑しい身分の影武者（代役）を本物らしくするための「教育」に費やされるのも同じ。また、その秘密を知っているのが、本作では都承旨のホ・ギユン（リュ・スンリョン）と内官のチョ（チャン・グアン）だけで、王妃（ハン・ヒョジュ）や護衛官のト部将（キム・イングオン）にも極秘にされているが、そんなトップシークレット保持のための粹組みも似たようなものだった。また、武田勢の不審な動きを探る中で織田信長や徳川家康が「ひょっとして今の信玄は影武者では？」と疑い始めるところから後半のストーリーが展開していくのも基本的に同じ。違うのは、敵が外にいるのか、それとも本作の吏曹大臣パク・チュンソ（キム・ミョンゴン）のように内にいるかの違いだけだ。

したがって、この手の映画は後半のあるところまではストーリー展開が読めるが、さて『影武者』の場合は、ラストに向けたクライマックスはどうだったっけ？本作では、最初にハソンをニセモノと疑った（見破った）ト部将は何かごまかせたものの、王妃にはある時、遂にニセの王であることがバレてしまったから、さあ大変！さて、本作ではその後クライマックスに向けていかなる展開を？

<『チャップリンの独裁者』との異同を考える>

レオナルド・ディカプリオが「ルイ14世」と「鉄の仮面を着けられて牢獄に捕らわれている双子の弟フィリップ」の二役を演じた『仮面の男』（98年）は、アレクサンドル・デュマの『ダルタニヤン物語』をベースにしたアトス、アラミス、ポルトスという三銃士の活躍がメインだった。また、マーク・トウェインの『王子と乞食』は子供の目線での「入れ替え」で、本作のような「権力」とは無関係のものだった。それに対して、「権力」という観点からの最も極端な「入れ替え」を映画で実現したのが、『チャップリンの独裁者』（40年）だ。

これはナチス・ドイツを率いたヒトラーとヒトラーからとことん弾圧されたユダヤ人のしがらみがない床屋との「入れ替え」だが、その「入れ替え」が『影武者』や本作のような意図的なものではなく、全くの偶然であるところがミソ。同作が製作・発表された1940年にはヨーロッパでは既に第2次世界大戦が始まっていたうえ、日独伊三国同盟を締結していた日本は翌1941年12月8日には真珠湾攻撃を決定してアメリカとの戦争に踏み切ったから、当時の日本で同作を上映することは不可能で、同作の公開は1960年になった。チャップリンはそれまでサイレント（無声映画）にこだわっていたが、この世界的な名作最大の見せ所は、ラスト6分間におけるチャップリンの演説。「兵士諸君、君たちは野獣のような奴らの犠牲になってはいけない……。彼らは機械のような頭と心をもつ機械人間なのです」「兵士諸君、自由のために戦いなさい……。さあ、民主主義の名の下に私たちはその力を使いましょう」と熱く訴えるその演説は、アメリカの南北戦争（1861～65年）最大の激戦となった「ゲティスバーグの戦い」における戦没者のための国立墓地献納式典で、リンカーン大統領が行った「人民の、人民による、人民のための政治」という有名なゲティスバーグ演説に勝るとも劣らない名演説だった。

当初、「こんな男に武田信玄やヒトラーの代役が務まるの？」と思ったのに、意外にその代役が順調に成長し、今やホンモノ顔負けの役割を果たすようになるのは映画ならではの面白さだが、それは本作におけるハソンも同じ。王妃にちょっかいを出すサブストーリーはいかにイ・ビョンホンらしい（？）が、本作後半のクライマックスの一つは、いよいよ王の代役も今日限り、言われたとおり、しっかり事務処理の儀式を務めるだけと思っていたのに、明の国の戦争に朝鮮から2万人もの民を派兵するという大臣たちの横暴な決定にブチ切れたハソンが、王としての本音をぶちまけるシーンだ。その演説は「そなたたちに大事な事大の礼より、余にとつてはこの国と民が何百倍も大事である！」というものだが、このシーンを見ながら『チャップリンの独裁者』のあの名シーンを思い出したのは私だけではなかったはずだ。

<王朝内の派閥構造のお勉強もしっかりと！>

昨年12月9日の衆議院議員総選挙で大勝した自民党では、現在「脱派閥」を強く主張していた石破茂幹事長による事実上の「石破派」の結成が注目（問題視）されている。しかし、いつの時代も権力の集中するところに派閥ができるのは人間の性（さが）。しかし、朝鮮王朝内の「あの時代」における派閥構造は？

それは、パンフレットにある「朝鮮王朝時代の歩み」を「勉強」すればよくわかる。もともと朝鮮王朝には「日本軍が攻めてくる可能性が高い」とする「西人派」と「攻めてこない」とする「東人派」の二大派閥があったが、光海君が第15代王に即位した後、東人派は「北人派」と「南人派」に分裂し、さらに北人派は「大北派」と「小北派」に分裂したらしい。そして、日本軍を撃退するうえで大きな武勲を立てた光海君は大北派であったため、小北派や西人派から命を狙われることを恐れていたわけだ。田中角栄の時代における自民党の「派閥」はマイナス面も多かったが、活力の源泉にもなり、国会議員たちが切磋琢磨する学習の場にもなるというプラス面があったことはまちがいない。しかし、反対派閥による王の毒殺の危険まで考えなければならぬことになる、もはや派閥は「百害あって一利なし」であることは明らかだ。

本作はエンタメ時代劇の面に少しウエイトを置きすぎ、ユーモア過剰の面もあるが、少しだけ出てくる「北人派」という字幕から、しっかり派閥のお勉強も！

<手品のような「入れ替えの妙」に注目！>

いくら顔が似ていても、また教育によって立居振舞い、仕草をうまく真似ることができても、王妃と「夜の床」を共にすれば所詮ニセモノはニセモノ、バレるに決まっている。したがって、ホンモノの王が病にふせている間、ホ・ギユンがハソンに対して決して王妃を近づけないように申し向けたのは当然。しかし、光海君は側近もたくさんいたようだから、「王は最近、夜のお仕事をしていないらしい」という噂が立ち始めると、ちょっとヤバイことに……。幸い、毒殺（未遂）の疑いもあった王の病の原因が判明し始めるとともに、病も少しずつ快方に向かったから、いよいよ「15日間の空白」を経て光海君が王座に復活という段階になったが、そこで光海君がハソンに対して下した処断は当然冷酷なものだった。そうすべきことはホ・ギユンもわかっているが、実際に15日間一緒にハソンと過ごしてみると、意外にハソンはいい奴？さらに、ひょっとしてこちらの方がホンモノの王に相応しいかも？そんな思いもチラホラと湧いてくるほど、ホ・ギユンの心は動揺することに……。

「こいつはニセモノ！」最初にそう見破った護衛官のト部将をうまく丸め込めたのは、たまたまハソンが王妃の左の胸にホク口があることをチラリと盗み見していたためだったが、本作はクライマックスにおける「入れ替えの妙」に全く同じ「トリック」を使うから、それに注目！

張りめぐらせた情報網からさまざまな情報を集め、それを分析した結果、「今の王はニセモノ！」。そう結論づけたパク・チュンソは「正義は我にあり！」と判断し、光海君を打倒するべく武装兵力をもって宮殿を襲撃。その軍勢の前に一人堂々と登場してきたのが、光海君だが、さてこれはニセモノ？それともホンモノ？パク・チュンソは、光海君に対して「お前はニセモノだ」「ホンモノだというのなら、壬辰倭乱の戦いに受けた左胸の傷を見せろ！」と迫ったが、さてここで光海君はいかなる対応を……？

2013（平成25）年2月19日記